“関わる喜び”を街の誇りに ―― 関わることで生まれる、もう一つのスポーツの感動

進行：

第 2 部のテーマは「関わる喜びをまちの誇りに―スポーツとインクルージョン―」です。東京デフリンピック 2025 バレーボール女子日本代表で金メダルを獲得した、長谷山優美さんと、手話通訳士の保科隼希さんにお話を伺いました。

まずは、昨年 11 月に東京で初開催されたデフリンピックについて、それぞれ振り返っていただきました。

長谷山さん：

私は、デフリンピックに出場するのは今回が 3 回目になります。高校 2 年生のときに初参加となった、2017 年にトルコ共和国のサムスンで開催されたデフリンピックで、実は金メダルを獲得することができました。

今回、東京デフリンピックで２個目の金メダルを取ることができましたが、 １回目に取った時の金メダルと今回の金メダルとでは重みが、全く違っていました。１つ目の金メダルは、私が初出場だったこともあり、デフリンピックに対するイメージも全くわかっていないままの出場でしたので、先輩たちのおかげで、取れたという気持ちがありました。2 回目のブラジル大会では、（日本選手団にコロナ感染が広がった影響で途中棄権となり）悔しい思い出が残っています。

東京デフリンピックはブラジル大会とほぼ同じメンバーで、金メダルを取ることをチームの目標にしていたので、たくさんの苦労がありましたが、念願叶って、本当に嬉しい気持ちになりました。

進行：

地元、東京開催について、プレッシャーもあったかと思いますが、優勝を決めて、一番に思い浮かんだ場面や人はいますか？

長谷山さん：

そうですね。 思い浮かんだ人で言いますと、私の夫でした。現在、私はアスリート社員として仕事をしています。バレーボールをしながらお仕事をするという、2 つの軸で働いています。過去には、フルタイムで働いていた時期も長くあって、仕事がうまくいかなかった期間、その頃の苦労も私の夫が見てきて支えてくれていました。

実は、合宿の中で、チームの人間関係がうまくいかないような時期もありました。チームワークがとても大切な競技ですので、うまくいかない時の悩みを夫に相談したことがあります。彼は野球の経験があるので、競技は違うものの、団体競技の共通点があり、野球にとても熱い思いがある人です。野球でもいろんなトラブルが起きて、そういう状況を見ているので、夫といろんな考え方を話す中で、学びになることも多かったです。

また、私は中学校 3 年生からデフバレーボールの強化合宿に参加していて、10 年ほど日本代表として活動していますが、もちろん、ずっとうまくいっていたわけではなく、いろんな苦労や大変だったこともありました。そんな時は夫とも喧嘩とか、お互い目が合わないみたいなこともありました。自分が金メダルを取った時には、これまでの生活の中で、夫に悪いことしたな～と思うこともあって、夫を思い出したのが一番でした。

最終的にみんな一つのチームとなって、金メダルを獲得できて本当によかった、頑張ってきてよかったと、そう思いました。

東京 2025 デフリンピックで金メダルを獲得したバレーボール女子日本代表 長谷山優美氏

司会：

2 つのメダルでは重みが違うというお話もありましたが、メダルは重たいですか？

長谷山さん：

トルコのサムスン大会のメダルも、結構、重みがありましたが、今回のメダルは、それ以上に重量があります。しかも、メダルのデザインがとてもおしゃれで、折り鶴の絵が描かれています。メダルのデザインも素敵ですが、さらに木製の箱がついていて、「これはすごいね」って、選手たちは話をしていました。実は、デフリンピックでは、東京大会で初めての木製のきれいな箱がついてきて、さらにメダルの価値が上がりました。

司会：

続いて、手話通訳士の保科さんにもお話を伺います。保科さんは、東京 2020 パラリンピックの開会式、閉会式で手話通訳のお仕事をされたことをきっかけに、手話通訳の道へ進

まれました。東京デフリンピックでは、陸上競技の手話通訳として、選手団とともに大会に出場されていました。多くのメダル獲得の場面に遭遇したと思いますが、印象に残っている場面を教えてください。

保科さん：

私は、ご紹介いただいた通り、東京デフリンピックでは、陸上競技の手話通訳として日本選手団も帯同をしていましたが、それまでの期間は、フリーランスで手話通訳の仕事をしていました。バレーボールやサッカー、水泳の選手など、いろんな競技のデフスポーツの関係者と仕事をしてきましたし、時間を共にしてきたので、彼らとの時間も思い出しました。

デフリンピックの本番では、陸上の最終日、リレーの決勝があるその前日の夜が一番印象に残っています。というのも、男子リレーが 4×100ｍと、 4×400ｍの 2 種目が決勝に残っていて、どちらも金メダルを取りに行こうと作戦を練っていました。

金メダルを目指す中で、2 種目ともに出たいと思っている選手もいましたが、その 2 種目の間の時間が 1 時間ぐらいしかないという事情もあって。どちらも金メダルを取りに行くためには、チーム力で取りに行こうと。 一人の速い人に頼って出るのではなく、みんなで力を合わせて金メダルを取りに行こう、というミーティングをしたのが前日の夜でした。

陸上競技は、個人種目と思われがちですが、やっぱりチームだなって改めて実感した瞬間でもありましたし、その時のメンバー発表を通訳したのですが、私も一緒に戦っているなって改めて感じた瞬間でした。

手話通訳士の保科隼希氏。東京 2025 デフリンピックでは、陸上競技選手団に帯同した。

司会：

女子バレーも陸上も、金メダルという結果になりましたが、それまでの過程で印象的だったことを教えてください。

長谷山さん：

バレーボールは、チームワークが大切になるスポーツなので、選手同士の信頼関係やスタッフ、監督、コーチ、マネージャー等、様々な立場の方との信頼関係も大きくて、その信頼関係が一番大きな要素だと思いました。

選手の育った環境もそれぞれ異なっていて、ろう学校で手話を学んで育った選手もいれば、手話が全くできない、口話でコミュニケーションをとる選手もいます。コミュニケーション方法は、選手それぞれ違っていて、居住地も北海道から鹿児島まで、別々のところに住んでいて、簡単に集まって練習できるわけではありませんでした。

月に 1〜2 回程度、 2 泊 3 日という短い期間で、みんなで集中的に合宿を行ってきました。その短い期間でもコミュニケーションをしっかりとることを意識しながら合宿をしてきました。手話がわからない環境で育った選手にも、共通認識を持つようチームのルールを説明したり、練習が終わった後の昼ご飯、夜ご飯、空いている時間で、積極的にコミュニケーションを取ったりしながら、手話で話をして、一緒にご飯を食べて、手話を覚える

試みをしていました。

それからスタッフとの関係性で言えば、監督やコーチがとても厳しいというか、甘くないというか、言い方が難しいのですが、とてもストレートに指摘をされるので、少し傷ついちゃうみたいなこともありました。でもやっぱり私たちが目指しているところは、同じ金メダルという気持ちは変わらないわけで、その気持ちをしっかりと持った上で、素直に指摘を受け止めて、考え方を変えて、みんなで一緒に監督やコーチについてきました。

今回、金メダルを取れたことも、監督やその周りの人々の支えがあったからで、私たちは自分たち自身に対する考え方も変わったと思っていますし、トルコ大会やブラジル大会の時の攻撃スタイルと、今回の東京大会の攻撃スタイルも全く変えました。変化できたのは、監督やコーチ陣のおかげだと思っています。

それだけではなくて、スタッフを信じて選手たちがついていった、お互いにリスペクトできたことが、金メダルにつながったのかなと思っています。

保科さん：

メディアに取り上げてもらえるのは結果だと思いますが、結果までのプロセスが大事だなと思っています。今回のデフリンピックでは、選手の皆さんとたくさん関わることができたのが印象的だったなと思っています。

特に、渋谷区では、デフリンピックの開催までに、ろう者のゲストを呼んで一緒にトークイベントを開催したり、ワークショップを実施したりして、ろう者と一緒に過ごす時間が多かったことが、一番大切だったと思っています。

よくいただく質問で、「どうやって応援したらいいですか」とか「どうやったら一緒に関われますか」とか「手話って必要ですか」という質問をいただきます。その答えをすぐに出すというよりも、やっぱり一緒に時間を過ごしていく中で、自分の肌感覚でわかっていくことが一番大きいというか、それでしか分かれないなと思っているので、一緒に過ごす時間を取ることができたというのが、今回のデフリンピックに向けて一番良かった動きだったと感じています。

司会：

ろう者と関わる時間やチームワークが重要だというお話をいただきました。

渋谷区では、障がい者スポーツを通じて、ダイバーシティ&イクルージョンを意識したまちづくりを推進しているのですが、デフリンピックでの経験を通して、スポーツと街とのつながりを感じた瞬間はありましたか。

保科さん：

私は、出身が福島県で、高校卒業まで福島で生活をしていました。今回、東京デフリンピックのサッカー競技は福島で開催されて、行政や地域の方々もとても協力的で、福島で開催できてよかったなと個人的には思っています。

それには理由があって、今まで興味がなかった人たちも巻き込むことができた実感があるからです。正直、今までの手話関係のイベントや大会には、身内や手話サークルに通っている人が中心でした。今までは関係なかった人たちが、デフリンピックをテレビで見たから行ってみようとか、自分の知り合いがスタッフとして関わっているから、会いに行ってみようとかって動くきっかけになったことは、スポーツが地域を巻き込む力を持っているんだなと強く感じました。

実際、デフリンピックに出場した選手たちは、いろいろな人から声をかけてもらう機会が増えたようで、スポーツを通じて、新たなつながりや変化を実感しています。これから、今回のデフリンピックをイベントで終わらせないことが一番大事だと思っています。

長谷山さん：

私の出身は茅ヶ崎で 20 歳くらいまで過ごしたのですが、本当にいろんな方に応援に来ていただきました。 茅ヶ崎からわざわざ駒沢体育館まで、朝早くから列に並んでくれて応援に来てくれました。今、住んでいる江戸川区の関係者の方々も応援にお越しくださいましたし、練習拠点の一つである早稲田大学の学生さんも応援に来てくださったんです。

私と関わりのある地元、地域、学校のたくさんの方々が、実際に試合に見に来てくださって、私一人ではなく、他の選手たちからも、同じように、自分の関わっている街や地元の人々が来てくださったと聞きました。

自分たちがイベントや講演で行った自治体、練習拠点として活動していた自治体の方々が足を運んでくださるというのが、周りの方々と一緒に試合を作っていく感覚があって、とても嬉しかったです。

今後も、デフリンピック、ろう者の大会や試合を見に来てもらい、応援に来ていただきたいと思っています。また、どんな内容でもいいので、 SNS を通して発信をしてもらいたいです。この選手が良かったとか、かっこよかったとか、どんな情報でもいいので、発信していただくことが、選手たちにとっては大きな力になります。私たちも SNS 世代で、Instagram をよく見ているので、いろんな業界の人が見てくれて応援してくれていることが分かると、私たちも頑張ろうという気持ちにつながるので、力になるなと思っています。

司会：

スポーツの現場で、手話通訳は、人と人をつなぐ重要な役割であると同時に、魅力があると思いますが、身近で感じた、スポーツの現場の魅力は何だったでしょうか。

保科さん：

手話通訳士としてスポーツの場に関わる魅力は、やはり一緒に戦うということだと思っています。私は、コーチと選手をつなぐことをメインに関わっているので、試合に行く選手たちを間近で見て感じることができます。

コーチからの言葉を選手に伝えたり、選手から今の体調を話す中でコーチに伝えたり、競技に近い立場にいます。手話通訳は、単に情報を伝達するだけの仕事と思われがちかもしれませんが、チームで一緒に取り組んでいます。例えば、コンディションの状態を選手から聞いて、通訳から報告をすることがありますが、選手としては監督やコーチには伝えたくないであろう内容もあって、そこは一人の人間として話を聞いて、寄り添うことで、選手たちのプレッシャーを感じながら一緒に戦うことができた実感があります。

スポーツの現場で、手話通訳をしていなかったら経験することができなかったことだと思っていて、自分にとっては一番魅力的に感じているところです。

司会：

長谷山選手は、手話通訳士との関わりの中で、何か感じたことはありますか。

長谷山さん：

手話通訳士との関わりだと、私自身は中 3 の強化合宿の時から参加しているのですが、私が加わるもっと前から手話通訳として、チームに関わってくださっている方がいらっしゃいます。通訳によっては監督が話して伝えたい内容が、選手たちにうまく伝わらなくて、その言葉の捉え方にズレが起こることがあります。保科さんのお話を聞いていて、その言葉のズレをうまく調整されていて、手話通訳士のお仕事はとても大変そうだな、苦労も多いだろうなと思いました。

選手の中には、手話がメインの言語表現で生活をしている選手もいれば、口話がメインの選手もいるので、選手同士の間でも認識が合っているだろうと思っていても、実はずれていることもあって、それが練習の中に影響として出るんですよね。そうすると、監督から、私が説明したことをみんな分かっている？って、問いかけがあったりします。

選手間や選手と監督の間の、信頼関係にも少し影響が出る場面もあって、そんなときに、手話通訳の方が上手に、監督や選手たちの伝えたいことを理解して、今はこういうことだよとフォローしてくれる場面があって、私たち選手としては手話通訳の存在をとても大きく感じています。

東京 2025 デフリンピックバレーボール　トルコ戦での一幕　　©東京都

保科さん：

デフリンピックの開催をきっかけに、文字起こしの機械など情報保障の整備が広がってき

ました。ただ、情報保証を担保することで共生社会が実現するのではありません。手話通訳の役割は、情報を伝えるだけ、選手たちが話す情報を手話にするだけではなくて、その奥にあるものを伝えることも重要で、その場の空気や雰囲気も、一緒に作ることだと思っています。

今回のデフリンピックを契機に、手話通訳への理解や必要性も少しずつ顕在化してきて、手話通訳の存在を大切にすることに賛同して動いてくれる人がすごく増えてきたなという印象があるので、嬉しいなと思っています。

司会：

最後にメッセージをお願いします。

長谷山さん：

デフリンピックは、閉幕しましたが、本当に盛り上がった大会だと思っています。これから、冬季のデフリンピックもありますし、それぞれの競技の世界選手権が開催されます。次のデフリンピックは、4 年後にギリシャのアテネで開催されます。今回の盛り上がりが、続いていくといいなと思います。

選手たちとしても積極的にイベントに発信するなど活動を続けていきたいと思っていますので、ぜひ皆さんも興味を持ち続けていただいて、デフリンピックだけではなく、デフスポーツ、また手話に興味を持っていただけると、私たちはすごく嬉しいなと思っています。

保科さん：

今、長谷山選手も言っていたように、 デフリンピック以外の、他の地域のデフスポーツの大会があります。先日、卓球の渋谷区長杯（チャレンジドカップ）がありましたが、デフリンピックが盛り上がったのに、地域の大会というか、一般の大会になると、まだまだ知ってもらえていないなと感じました。

渋谷区の皆さんは、パラスポーツをはじめ、スポーツ振興に力を入れていると思うので、区長杯を中心に盛り上げてほしいという思いと、プロスポーツと連携して、手話通訳を付

けるなどの可能性もあると思っています。手話通訳が関わることで、聞こえる人も、聞こえない人も楽しめる空間づくりや盛り上げられると思うので、聞こえる人のために必要とか、聞こえない人のために手話通訳が必要とかそういうのではなくて、手話通訳がつくことによって全体が盛り上がる存在になりたいですし、今後、価値観を広げるためにもいろんな人と一緒に活動ができたらいいなと個人的に思っています。

第 2 部では、デフリンピックを振り返りながら、多岐に渡るお話を伺いました。渋谷区では、今後も、継続的にデフスポーツ、パラスポーツの推進を通じて、共生社会の実現に向けた取組を進めていきます。